

---

# ソクラテスの背中

やしろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ソクラテスの背中

### 【Zコード】

Z5809Y

### 【作者名】

やしろ

### 【あらすじ】

夏休みの暑いある日、何年も帰つて来なかつた姉ちゃんが突然帰つて來た。受験生であるおれを尻目にのんきに遊んでなんかいるけど、いつたいどうして帰つて來たんだろう?モラトリアムのど真ん中で、一人の姉弟がちょっとだけ前向きになる、夏のお話。

## 教訓その一、年上のせょうだいは容赦がない

年上のせょうだいって、ちょっと先に生まれて来たってだけで、どうじつて弟に対して、「遠慮」という言葉がこの世にないもののように振舞うことが出来るんだろう。

というのも、真夏の昼下がり、太陽の光を直に浴びながら歩き、ふらふらになつて家に帰つて来たおれに姉ちゃんが突き付けたものは、足踏みポンプだつたからだ。

「…何これ、何年も会つていなきょうだいの再会の一瞬間に使われるセリフじゃないなとは思つた。夏の日差しといつのは、とにかく今まで人間の思考を鈍らせてしまうものらしい。

「何これ、はないでしよう、司。家に帰つて來たんだから、まずはおかえりつて言つ。ね？」姉ちゃんの答えもとことんずれているよつの気がしたけど、こつちは別に日差しの有無は関係ない。もとからずされているのだ。全然、変わつてない。

ため息が出た。自分の子どもが迷子になつて、さんざん心配してようやく探し出したというのに、「えーっ、まだ遊んでいたいんだけど」と言われた親の気持ちって、たぶんこんな感じなんだろうな。何年も帰つて来ないから、それなりに心配していたというのに、のんきなもんだ。

素直に言われたことに従つても癪な気がして、おれはわざと声をとがらせて言つてみる。

「今おれが帰つて來たところなんだけど」

「何甘いこと言つてんのよ。社会人として家を出た姉が久しぶりに帰省してきたんだから、親の脛かじつてる弟のあんたが私におかれりを言つ。これが順序というものよ」

よくわからない理屈を平然と言つてのける姉ちゃんには、8月の太陽に負けないだけの力強さがあつて、順序うんぬんというくだりにはまったく納得していなかつたのに、おれの口からは自然に「お

かえり」といつ言葉が出た。

「ただいま、同」

姉ちゃんは嬉しそうに笑った。

その笑顔が昔と全然変わつてなかつたから、おれはひょっと顔をしかめて見せた。  
元気そうで安心した、なんて思つたことを認めるのは、やつぱり癪だつたから。

「ときこ、同くん。今日は暑いと思わない？」

姉ちゃんは手に持つた足踏みポンプをちらちら見ながら言ひ。

おれは自分の眉間にしわが寄つていくのを感じた。

姉ちゃんがくん付けしてくるときは、おれにやっかになことを押しつけようとしてくるときだからだ。

「うん、すげー暑い。庭に長居するのはよくないよな、やつぱり。おれ、部屋行かなきや。勉強しなこと」玄関のドアノブに手を伸ばすも、姉ちゃんは割り込む形でそれを遮つた。

「そんな司くんに朗報です。これはね、踏むだけでこの殺人的な暑さから逃れられる魔法のポンプなの。そんなわけだから、踏んでみなさい」

姉ちゃんが、できの悪いキャッチコピーを並べ立てている間に、おれは色あせた黄色いポンプの先を田でたどつた。チューブは、ポンプと同じく色あせ、くしゃくしゃになつたビニールのかたまりにつながつていた。

「要するに、ビニールプールを膨らませろつてことだる」

「まあ、夢のない言い方をすれば、そういうことになるわね」

姉ちゃんのあつけからんとしたもの言つておれはため息をつく。世の中の25歳つて、みんなこうなんだろうか。

「踏むだけで涼しくなるんなら、姉ちゃんが踏めばいいだろ。

おれ、譲つてやるから」それだけ言って自分の部屋に逃げ出やうとするおれを、姉ちゃんは素晴らしい反射神経で捕える。

「何言つてんのよ。踏むだけで涼しくなれるわけないでしょ。あんた高校生にもなつてそんな甘つたれたこと言つてると、すぐに社会に出て力モられちゃうわよ。ほら、そくならないためにも、これを踏んで世の中の厳しさを体に刻みなさい」

涼しくなるって言つたのはどこのどいつとか、ポンプ踏んで強い精神が身に付くなんてそれこそ甘い考え方だ、とか言つべきことはたくさんあつたんだけど、おれは言わなかつた。言えば10倍になつて返つてくることがわからないくらい付き合つてが浅いわけじゃない。

「おれ、勉強したいんだよね。ほら、受験生だし、学校からの課題もあるし。それに、学生の本分つて、勉強だろ」と、正論を盾にしおらしく言つてみた。泣き落としみたいでちょっと抵抗があつたけど、このままだと姉ちゃんのペースに巻き込まれてしまつ。

おれだってもう高校生だ。しかも最高学年。ビニールプールを膨らませて喜んでくるような年ではないのだ。

姉ちゃんの中では、おれは何年も前の「小さな弟」のままなんだろうけど、そうそう振りまわされてばかりもいられない。自分の立場を確立するためにも、ここはなんとしても逃げ切らなきゃいけない。我ながらみみつちい戦いだと呆れてしまつけど、こうこう些細なところから白星を拾つていかなくけや。

そんなおれの健気な試みを知つてか知らずか、姉ちゃんはすぐには、「あら、足踏みポンプを踏むことだつて、立派な勉強よ。物理の試験で関連問題が出るかもしれないじゃない。それに、大学だつてビールプールをふくらました経験のないような世間知らずな学生なんか、今どきほしがらないわよ」と、よくわからない屁理屈を返してくる。

姉ちゃんのすゞごことは、どんなに根拠のないほり話であつうと、堂々と断言できてしまつことだ。

そしておれの情けないところは、その勢いに根負けして何も言えなくなつてしまつところだらう。

おれは反論するのを諦めて、おとなしく足踏みポンプを踏む作業に入る。

何が嬉しくて、真夏の曇下がり、自宅の庭で、汗だくになりながら足踏みなんてしているんだろう。

ビニールプールはおれの気分とは反比例に、踏むたびに盛り上がりつていく。

姉ちゃんとおれは7歳離れている。一人しかいないきょうだいにしては、けつこう年の差がある方なんじやないだらうか。

小学生の頃は頻繁に友だちの家に遊びに行つたりもしたけど、ランドセルの隣に物理の教科書が転がってる家は、余所では見たことがなかつたような気がする。

「ひやー、なんだこれ、呪文?」遊びに来た友だちが姉ちゃんの教科書を勝手に拾い上げて驚くのを、「おいおい勝手に触るなよ。姉ちゃん、怒るとマジめんどくさいから」とたしなめながらも、内心まんざらでもなかつたことは今でも覚えている。

その頃の7歳差といつのは、「子ども」と「大人」くらいの開きがあつたように思う。

アルファベットをよひやく全部覚えたかどうかといつおれは、姉ちゃんが使い込んでいる英語の教科書の密度を前にしてただ言葉を失くした。

この教科書と向き合える未来が本当にあるとしたら、未来って、なんて遠いところにあるんだらう。

円まで歩いて行くのと同じくらい、途方もなすことのよつて思えた。

「宿題だから」

教科書と、それを使って勉強している姉ちゃんを見比べて神妙な

顔をして「おれに、姉ちゃんはそう言った。」

「別に、全部をそつくり理解出来るわけじゃないよ」

その口調が、なぜか言い訳しているみたいに気まり悪そうだったことだ、余計に姉ちゃんとおれの差を際立たせていた。

それが7年分の開きなのか、おれがもつと大きくなれば埋められる距離なのか、今でもわからない。

その後おれは中学生になり、姉ちゃんは働くために家を出た。

使う人間のいなくなつた教科書を、おれはたまに開いてはそのたびにため息をついた。わからない単語だらけの現状に脱力したというのもあつたけど、それだけじゃない。

いつかおれが姉ちゃんの年齢になれば、こんなわけのわからない文字の羅列も理解出来るようになるだろうかと、せっかちに膨らむ期待を押し出すためというのが大きかつたような気がする。

そのくせ、ときどきマークーで線が引かれていたり、単語の上にその意味がメモしてあるのを見つけるたび、姉ちゃんをすごく遠くに感じた。

おれが紙飛行機のように頼りなく、乗れる風をさがしていくあいだに、姉ちゃんはジオラマ機のように、音速でおれを引き離していく。

飛行機雲をまっすぐ残して、見えない場所に行ってしまった。

あれにとつて、姉ちゃんはそんな存在だった。

よつやくビニールプールを蘇らせ、姉ちゃんを呼びに家の中に入ると、話し声が聞こえてきた。

「ちは一直線に伸びた廊下に面していくつかの部屋が並んでいる構成だから、姉ちゃんがどの部屋にいるのか、おれからは見えない。最初はテレビでも点けているのかと思つたけど、姉ちゃんの声がそれに混じっているのは変だ。家には今、おれと姉ちゃんしかいない。おれがこうして黙つていることを踏まえると、話し相手はいな

いはずだ。一人暮しをするつむじ、独り言やテレビに話しかける癖でもついてしまったんだろうか。

「すみません、ええ、はい」

姉ちゃんの話し声が急に大きくなり、おれは身を硬くする。

声の聞こえてきた部屋をそっと覗き込むと、じゅうに背を向けた姉ちゃんが携帯を握って頭を下げていた。

姉ちゃんらしくない早い口調にたじろいで、そこを離れる」とも出来ずに、おれはただ立ち尽くした。

「はい、そうです。先生には伝えておきましたので、いつも通りにやつていただいかまいません。はい、大丈夫です」「

仕事の話、か。自分に言い聞かせるように、胸のなかで反芻した。そうだよな、姉ちゃん、働いてるもんな。電話くらい来るよな。上司だつているだらうし、クレームが来れば謝るのは普通だよな。頭ではわかつているのに、受けた衝撃はなかなか引いていかなかつた。

すぐ子供じみたことだとは思つけど、姉ちゃんが誰かに頭を下げていてるという現実が信じられなかつたのだ。

べつに、姉ちゃんが敬語も使えないような無礼な人間だと思つていたわけではない。記憶をちゃんと連れ、怒られたり謝つている場面なんていくらでも出でてくるはずだ。家庭訪問で担任の先生が家に来たときだつて、ちゃんと礼儀正しく接していた覚えがある。

おれにするような振舞いを、全員にしてるわけじゃないことも知つてゐる。

でも、たぶんそうこない」とじやない。

今、背中を丸めて、じこにいないうちかに頭を下げ続けている姉ちゃんは、「姉」でも「生徒」でも「子ども」でもない、知らない名前を生きている。

その片鱗を見てしまつたことは、すぐ悪いことのような気がた。それでも田を逸らすことが出来なかつたのは、おれが姉ちゃんとは違う名前を生きているからだろうか。

「はい」の間隔が狭まり、最後に「失礼します」と言つと、相手が先に切るのを待つような間を空けて、姉ちゃんは携帯を耳から離した。

「わ、びっくりした。いつからいたのよ」

こつちに振り返った拍子に驚く姉ちゃんに何と言つたらいいのかわからず、目を合わせられないおれに、姉ちゃんはふと笑つて言う。

「仕事の電話。ちゃんと連絡伝わってなかつたみたい」

休み中にまでかけてくるんだからびっくりしちゃうよね、とおどけて付け加えた言葉は、おれに言い訳していかのよつて、気まり悪さを少しだけ滲ませていた。

「帰つて来ちゃつて、大丈夫なわけ？」言つてから、これじゃまるで、家に帰つてくる暇があるんなら仕事してると言つているよつに取られかねないことに気付いて、「いや、仕事つまくいってんのか、ちょっと気になつて」と慌てて付け加えた。

姉ちゃんはおれの言葉のニュアンスを取り違えなかつたようで、とくに氣を悪くした風でもなく「うん、大丈夫」と言つて笑つた。その表情に、切れかけた豆電球を連想して、おれは目をそらす。このまま姉ちゃんを見ていたら、知らなくてもいいことまで見えてきてしまいそうで、それが怖かつたからだ。

人はいろんな顔を持つてゐるという。おれにだつて、それがどういうことなのかはわかる。

姉ちゃんの本名は「望月渚」で、おれにとつては「姉ちゃん」でしかないけど、父さんや母さんの前では「娘」で、先生の前では「生徒」。いろんな名前があつて、それに合わせた顔がある。当たり前だ。そんなことはわかっている。

だからこそ、おれは「姉」以外の姉ちゃんを知りたいとは思わない。

職場先での「部下」だつたり、「後輩」だつたりする「望月渚」が、背中を丸めて、ここにいない誰かに平謝りする人間だというの

なら、おれはその姿を知つてはいけないような気がしてならないのだ。

「なんて顔してんのよ」

ふいに姉ちゃんはおれを見て笑つた。

「司、今考え込んでますつて顔、してたよ」

なんだよ、誰のせいだと思つてんだよ、そう言おうとしてやめた。こっちを見ている姉ちゃんの表情は、いつもどおりのものだったから。

ちょっとずれてて、おれを振りまわしてぱっかりで、そしてジエット機の軌跡のようにまっすぐな、おれの知つている姉ちゃんだったから。

「大丈夫だつて。私は、ちゃんと仕事はやつて來たから。今は休暇。休みなのよ。労働者にも、実家でくつろぐ権利はあるわ。学校で、習わなかつた？」

「ふーん。姉ちゃんにも労働者なんて大層な名前が付くんだ。それは知らなかつた」

「失礼ね。盆と正月も返上して、何年も帰省せずに健気に働く人間に、他にどんな名前がつくつてのよ」

「知らねーよ。姉ちゃんは姉ちゃんだろ」

おれの投げやりとも取れる言葉に、姉ちゃんは不意を突かれたかのように押し黙つた。おれもまさかそんな反応をされるとは思つていなかつたので、図らずも一人して黙り込んだ。

鏡を見たわけじゃないけど、おれ、今姉ちゃんがしているような間の抜けた顔をしているんだろうな。

先に笑いだしたのは姉ちゃんだった。

「言うじやん、司」

何がだよ、とは言わなかつた。なんとなくだけど、お互ひ会話の

間に同じことを考えていた気がしたのだ。

姉ちゃんは姉ちゃん、つまりおれの姉だ。この事実は動かない。

でも、姉ちゃんにとつては違うはずだ。「姉」なんて、自分に付

いたたくさんの名前の一つでしかない。

でも、本名はある。「姉ちゃん」でも「労働者」でもない、自分の名前が。

自分は自分、他の何者でもない。当たり前のようでいて、これつてけつこつ忘れてしまいがちなことなんじやないだろつか。少なくとも、姉ちゃんの反応を見て、おれはそう思わずにはいられなかつた。

「プール、膨らんだ?」

「ひとつ」「元気

「そう、ありがと」「う

立ちあがり、ドア付近に立つているおれとすれ違うよう出て行こうとする姉ちゃんが、ふいに立ち止まつた。

「なんだよ」すぐ近い場所で止まるものだから、姉ちゃんの顔が近い。そこで初めて、薄く化粧をしてこることに気が付いた。

今さらだけど、姉ちゃんももう化粧をするような年齢になつたんだ。

「司、背、伸びた?」「う

「えつ」「えつ

「だつて、前は私の方が田の位置高かつたじゃない? 今、司の方が田線高い

言られてみてようやく気付いた。こつの間に追い抜いていたんだるひ。

「あー、なんかムカつく。もつと牛乳、飲まなきゃダメかなー」「う

「なんだよ、おれの方が高くて当然だろ。むしろ高校生にもなつて姉ちゃんより小さいんじゃ、おれが恥ずかしいよ」

姉ちゃんは女子にしてはけつこつ背が高い方だったから、別に追い抜けないからと黙つておれが特別チビということにはならないけど、男子として女きょうだいは抜いておかなきゃいけないような気はしていた。

「なによ、その余裕。昔は、姉ちゃんなんてすぐ追い抜いてやる

つて、肩並べるたびにムキになつてたのにさ

たしかにそんな張り合いをした覚えがある。おれが一方的に姉ちゃんに対抗心を燃やしていたから、張り合いという言い方は間違っているのかもしれないけど。

「私、縮んだのかな」

姉ちゃんがぽつりと言つ。ほとんど独り言だつた。

「やだね、年をとるつて。成長から遠ざかっていくみたい」

おれより少し低い場所にある顔は、汗ではがれた薄化粧からうつすらクマを覗かせていた。年をとる、という言葉がふいに現実味を帯びて姉ちゃんにのしかかつてくるのが見えた気がして、ぞつとした。

さつき電話していたときに見せた小さな背中と、それを隠そうとした弱弱しい笑顔がふいによぎる。

「おれが伸びたんだよ」姉ちゃんの小さな声をかき消したくて、自分でも驚くほど大きい声を出していた。

きょとんとしている姉ちゃんに、おれは言わずにはいられなかつた。

「縮んだつて、なんだよ。おれが大きくなつたの。べつに姉ちゃんが小さくなつたわけじゃないし。姉ちゃんがそんな調子じや、おれ、抜いたつて嬉しくないじやん。おれ、姉ちゃんを抜くのが目標だつたんだぞ」

言いたいことが伝えられたよつの気がちつともしなくて、もどかしくて腹が立つた。

昔はたしかに姉ちゃんを追い抜きたかつた。でも、同時に、いつまで経つても抜けないだろうなとも思つていた。

だつて、姉ちゃんはいつもおれのずっと先にいる人だつたから。意地になつたり、ため息をつきながらでも、おれはその背中をずっと追つていたかつた。

姉ちゃんが先を走つてたから、おれはこれから田指すずっと先の場所に辿り着きたいと思えた。

先回りしておいて、「ここにはいいもの、何もなかつたよ。あんたはこれから通るの？悲惨だね」なんて言ひのはするい。

姉ちゃんにはいつも、今の自分に自信を持つていてほしい。

そう望んでしまつ」とは、自分勝手なことなんだろうか。

「そうだね」

おれの思考を読みとつたかのよつたなタイミングで言われた一言につられて、姉ちゃんと目が合つ。意識していないうちに目をそらしていたようだ。

「司は、大きくなつた」

姉ちゃんはおれとの身長差を確かめるよつて、ちょっと上を見て笑う。

「とつても、大きくなつたね」

のんびりした姉ちゃんの口ぶりからは、喜んでくれているのをちゃんと感じた。

だから、同じくらいの寂しさが含まれていたことは気付かないふりをしよう、そう思った。

**教訓その一、年上のわざうだいは容赦がない（後書き）**

「」今まで読んでいただきありがとうございました。感想いただけ  
ると嬉しいです。

## 教訓やのー、夏の日差しの下では利口でこられない

「ビニールプールに水を張る賑やかな音を聞き流し、おれは部屋に戻つて勉強を始める。

少年老いやすぐ、学成り難し。受験生になつてからは、すゞく時間が経つのが早くなつた。

まだ覚えていないことが多すぎるのに、たくさん問題を解いてはバツ印を自分に増やしていく。正直、すこく気が滅入る。

こんだけやつても、実際試験に出るのは1%程度つていうんだから、やつてらんないよな。

そうわかつていても参考書から田を離せないのは、根性があるといつべきか、諦めが悪いといつべきか。

そんな雑念も、問題の趣旨を飲み込み、解答へのプロセスを自分で組み立てていいくうちに消えていった。

血が學習のスタートは理数系の科目がいいと聞いたので、物理から始めるようにしてくる。物理は センスが一番問われる科目だといふけど、おれはわりと好きだ。筋道立て考えれば、ちゃんと正解が出る。

その点、国語や英語のような言語系の科目はこくらでも化けるし、肝心なことがちぐへたりげない表現でさうりと書いてあつたりする。それに、じつちのペースで考えることが出来ない、ところのがどうにも好きになれない。

人間味があると言えば聞こえはいいけど、誰かが好きに書いた文章を、読み手であるこちらが一生懸命になつて理解しようとするのは、なんだか腑に落ちない。

だから、という言い方は言い訳がましいのかもしれないけど、「姉ちゃん」はおれの苦手分野ということになる。

「…今度は、何」たつたこれだけの短い言葉を発するのに、こんなにエネルギーを使うのかと呆れるくらい、疲れた。

「何、なんてすぐ聞かない。あんた、仮にも受験生でしょ。」受験生は、考えるのが仕事。わからない問題が出たからって、試験官は親切に教えちゃくれないわよ

ようやく勉強に集中し始めたといひで急に庭にひつぱり出され、子ども用のビニールプールと25歳の姉を目の前にして、いつたい何をどうじひと言つただろう。姉ちゃんの物言いくおれはくらくらした。

そういうえば、今日は真夏だつて、天気予報で言つてたつけ。そんなことをほんやり思い出した。おれ、何やってんだう。ぼうつとしているおれにしひれをきらした姉ちゃんは、やれやれといった感じで首を振つたあと、ぽつりと言つた。

「この水、どうしたらいいのかな

「は?」

「ほら、プールに水張つたものの、後始末が、よくわからなくて。流すにしてもうちの庭、コンクリート製だから水たまりになっちゃうし。放つておけば蒸発するんだろうけど、これだけの量だと何日もかかるだらうじ、それまで置きっぱなしにできるほど、うちの庭、広くないでしょ。邪魔になるじ」

「まあ、そうだね」

「では向くんに問題です。ビニールプールに張られた水は、どうすればいいでしゅう?」

おれは、今度こそ田まいがして座り込んでしまった。これは真夏の日差しのせいじゃない。それだけはわかつた。

「だいたいさあ、なんで片づけ方も知らないのに、プールを広げよつなんて思つたわけ」おれは脱力感と倦怠感を少しでも体から出してしまおうと、ため息をつきながら言ひ。

「うーん、物置あさつてたらこのプールが出てきたから、ちよつとやつてみたくなつて」

「あんた、ビニールプールをちよつとやつてみたくなる年じゃないだろ……」

「だつて、私、ビニールプールなんてやつたことなかつたし」

「嘘つけ。おれは、これで遊んだ覚えがあるぞ」

「ほんとよ。これ、私が家にいたときにはなかつたんだから」

「嘘つけ、とまた言い返そうとして、思い出した。

そういうえば、父さんが福引きでこのプールを貰つてきたとき、姉ちゃんはすでに家を出でていた。まだぎりぎり小学生だったおれがちよつと遊んで、すぐに使わなくなつて、それつきり物置にしまい込まれたんだつけ。

「ビニールプールなんて、でかくなつてからやつたつて、楽しくないだろ」「

自分で遊んだことがあるというのは、やつぱり少しだけ後ろめたくて、おれの声は小さくなつていた。

「そりやね、小さい体の方が楽しめるんだろうけど、なんか、今やりたかつたのよ。大きくなつた、この体でさ

「何それ。意味分かんないんだけど」

額からまた一滴、汗が流れた。さっきからおれの体力は水分となって出て行くだけの一方通行だ。戻つて来ない。

並々と水を張られたビニールプールは、真夏の太陽を反射してきらきらと輝く。この光に手を入れたら、どんな感覚がするんだろう。気付いたら、片手を突つこんでいた。透明な色を裏切らなにような心地よさにつられて、もう片方の手も入れる。

「あ」つぶやいていた。「けつこう、気持ちいいかも」「

「でしよう? やっぱり、夏はプールなのよ」

我が家を得たりとばかりに胸を張る姉ちゃんの服装はさつきと変わつておらず、腕と足の部分のそでがまくられていのところから見ると、姉ちゃんもどうせおれと同じように手や足をちょっと浸した程度なんだろう。子ども用のプールで、大の大人が一人で出来ることなんてたかが知れてる。

そこまで考えたら、プールに浸していた手を水の中で併せ、姉ちゃんに向かつて放つていた。

水をかけられた姉ちゃんは一瞬、すぐ驚いていた。まさかおれが水遊びみたいなことをするとは思わなかつたんだろう。おれだって、手を突つこんだ段階では、まさかこんな子ビモッぽいことを自分でやるとは思わなかつた。

ただ、夏の太陽の日差しをいっぱいに浴びた、この光の結晶のような水を浴びたら、何かがきれいに流れ落ちるような気がしたのだ。姉ちゃんを覆つていた、何かが。

かけてから目が覚めるように、冷静になつた。何をやつているんだ、おれは。

姉ちゃんがきよとんとしているぶん、余計にきまりが悪い。我ながら、いつたい何を考えていたんだと責めずにはいられない。夏の暑さにあてられてしまつたんだ、そうとしか思えない。

ばしゃっという音がして、おれは自分が水をかけられたことに気が付く。そしておれに何か言ひ隙を『えす』に2回3回4回の水飛沫が飛んでくる。

「あんたから先にやつたんだからね、覚悟しなさいよ」

言葉の乱暴さとは裏腹に、姉ちゃんは楽しそうだ。やつぱり、一人でプール遊びはつまらなかつたんだろう。

おれは「ちよつ、顔はやめろよ」と言つたばかりに、姉ちゃんに顔面を重点爆撃された。たかが水遊び、という遠慮は一切ない。狭い庭を逃げ回りながら、おれはこのビニールプールで遊んでいたときのこと思い出していた。

姉ちゃんも、このプールで遊びたかったかなと、幼心に気がかりだつたんだつけ。

その頃に戻ることは出来ないけど、これで勘弁してよ。

水飛沫の向こうで笑う姉ちゃんを見て、自分のなかでくすぶつていた「7年前のおれ」は、少しだけ頷いてくれた。

教訓その一、夏の日差しの下では利口でこられない（後書き）

季節外れなのはわかっています。

## 教訓その三、聞いただけじゃわからないけど聞いてみてもわからない

チャイムが鳴って、教室に音が戻ってくる。  
テスト中というのは、どうしてあんなにも押し殺したような音しか聞こえてこないんだろう。

鉛筆が焦りながら紙の上を走つていく音、消しゴムが自分をすり減らしていく音、行くあてのないため息しかなかつたせいもまだとは違ひ、今はいろんな音がある。

肺の中の空気をそつくり入れ替える空氣の流れや、判別しきれないとたくさんのおしゃべり。

人間が、ここで生きて活動しているのだとたしかにわかる音が溢れるこのタイミングが、おれはけつこう好きだ。安心する。

「同、飯にしようぜ」

鳥羽が、移動するたくさんのクラスメイトの流れに逆らいながら、近くにある椅子を引き寄せて来る。片手には、いつも通りコンビニの袋を提げている。

「いやー、ようやく終わつたな、実力テスト」開放感のあるセリフに反して、鳥羽の表情はそんなに嬉しそうじやない。

受験といつラスボスを控えた今、夏休みの夏期講習での実力テストなんて中ボスをやり過ごしたくらいでは、手放しで喜べない気持ちよくわかる。

「大門3の最後の問題、わかつた?」おれは鞄から弁当を取り出しながら鳥羽に尋ねる。どうせすぐに解答が配られるけど、誰かと答え合わせしたくなつてしまつのが、受験生の悲しいところだ。

「やつきの科目、社会だろ?おれ、たぶん同と違う科目だぜ」

「えつ、鳥羽、地理じゃないの?」

「おれ、倫理。なんか、地理つて性に合わなくて」

科目に性が合うとか、あるんだろうか。

おれの疑問に気付いたのか、鳥羽は「ほら、世界中の地名をちま

ちま覚えてくのつて、面倒じゃん？」と付け加える。

鳥羽には「重人」という立派な名前があるのに、「重くておれに合わないから」という理由で、文字通り軽い名字を呼ぶように強要していく。

たしかに鳥羽には、女子を含め誰とでも気軽に話せるようなノリの良さがあるけど、本人が思つているほど「軽い人間」ではないと、いうのがおれの見立てだ。指摘すると不機嫌になるので言わない。まったく、照れやすい人間というのは面倒くさい。

「倫理だつて、思想家の意見とか全部覚えなきやいけないんだろ？同じくらい面倒だと思うけど？」

おれと鳥羽は理系だから、志望校によつてまちまちだけど、社会系の科目は一つ取ればいい。

おれの周りではその一枠に地理を選ぶやつがほとんどだった。地理は小学生の頃からやつてきた基礎があるけど、倫理は高校になってから始めて手をつける科目だ。とつつきにくい、という気持ちがある人間が多いのは自然なことだろう。

「おれも2年のときに倫理やつたけど、なんか、厄介な科目じゃね？抽象的つていうか、よくわからなかつたし」

日本史のように事実を学ぶのならわかるけど、「おれはこう思つんだよね」という一個人の意見を延々と覚えていくあの科目を続けていくのは、「昨日、こんな夢見たんだよね」と語られるくらい、反応に困る。「はあ、そうですか」という感想しか出でこないので。

「そうでもないぜ。おれ、けつこう倫理、好きだし」

鳥羽は菓子パンを手で千切りながら笑う。

パンを千切つて食べる男子を、おれは鳥羽の他に知らない。おれは、そんな鳥羽の品の良さを買つていて。

「どうか？おれはどこが楽しいのか、全然わかんないんだけど」

「樂しいつて言つより、面白いつていうのに近いかな。ソクラテスつて覚えてる？」

「まあ、一応」

本当は、せいぜい「初めて聞いた名前ではないな」という、ずいぶん頼りない記憶でしかない。

倫理の先生が「倫理の教科書の中で一番有名な人だからな」と言つていたけど、おれにとっては先生がその後にしたデカいくしゃみの方がずっと印象的だった。

「おれ、ソクラテスが教科書の最初の方に出て来たから、倫理好きになつたんだよね。授業について先生に質問しに行つたのなんて、それまでなかつたのに、ソクラテスだけはどうしても気になつちやつて」

授業の大半を夢の世界で受けている鳥羽にそのままで言わせるソクラテスつて、いつたい何者なんだろう。

一応授業は寝ないで受ける主義のおれが鳥羽に素直に聞くのは抵抗があつたから、わかつたようなフリをして少しづつ情報を拾つていくことにした。

「ソクラテスの何がそんなにいいんだ? おれ、特に印象に残らなかつたんだけど」

鳥羽はちょっとと考えるような間を空けてから「性格?」と自信なさそうに言う。

会つたこともない人間の性格を好きになれるつて、いつたいどういう理屈なんだろう。

おれの不審が露骨に顔に出でていたのか、鳥羽は「やつぱりわかんないよな、こんな説明じや」と、困つたように笑つた。

「でもさ、知つたかぶりしないのつて、かつこいいと思つんだよね、おれは。だからかな、惹かれただと思つ」

鳥羽はおれがソクラテスを知つていることを前提に話しているせいか、理由をすいぶん端折つていた。

おれがこの説明から得られたソクラテスの情報といえば、「とても謙虚な人らしい」ということだけ。それだけで倫理という科目自体好きになれるなんて、鳥羽の考えることはよくわからない。

でも、好きなものを誰かにわかつてもらおうと言葉を選びながら話

す鳥羽の姿は、なんだか眩しかった。

おれは、こんなふうに人に自分の考えを共有してほしいと思えるほど、勉強に入れ込んでいない。

倫理だろうが地理だろうが、他のすべての科目も、おれにとっては「受験に使うもの」でしかないのだ。

受験が終わつたとして、おれは今必死になつてやつてている勉強を、ただ「すこくしんどい思い出」としか思えなくなつているんだろうか。

自分から戻つてくる答えが、決しておれを前向きにしてくれないことがわかつていてから、おれは鳥羽に視線を戻す。

「先生に質問に行つたつて言つてたよな？ 何を聞きに行つたわけ？」

言いながら、教科書とノートを胸に抱えて一人職員室に入つて、鳥羽を想像してみた。

授業中に決して目が合わない類の生徒が「ここ」、もつと詳しく聞きたいんですけど」なんて真面目くさつて言つてきたんだから、先生はさぞかし驚いただろ？

そんな光景が目に浮かんでいたから、おれは鳥羽の一言に、すぐには反応出来なかつた。

「良く生きるつて、どうこうことですかって、聞いた」

鳥羽は、「空はどうして青色なんですか」と尋ねる子どものように、おれを何も言えなくさせた。

余計なものが何も着いていない、ただ純粹に「不思議だ」「知りたい」という欲求しかそこにはないのがよくわかるだけに、へタな一言で台無しになつてしまいそうな脆さがあつて、それがおれから「冗談で流す」とか「知つたように言つてみる」という常套手段を奪つていた。

「司も授業でやつたと思うけど、これつてソクラテスの言葉なんだ。おれバカだから、どういう意味なのかわかんなくてさ」

鳥羽はふいにおれから目を逸らすと、窓の外に広がる真っ青な空

を仰ぎ見る。そこに答えを探そうとしているようにも見えたし、宇宙に繋がっている空の奥行きに、ただ呆然としているようにも見えた。

ソクラテスがどんなやつなのか未だにわからないけど、おれは鳥羽と違つて、そいつのこと好きになれないような気がする。

良く生きること。充実した人生にしろってことなのか、悪いことをするなという意味なのか。簡単な言葉しか使っていないぶん、どんな意味にも取れるじゃないか。それって、なんだかずるい気がする。肝心な部分を教えてくれないなんて。

毎日、それこそ夏休みにもこつして勉強するために学校に来て、「もうすぐ受験だ」とあくせくしているおれの生活は、たぶん世間のほとんどの人から見て充実していると言えるだろ?。悪いことも特にしない。

受験が終わつて、大学生になつて、就職して、ネクタイを自分で絞められるようになつたら、おれはその後どうするんだろう。

きっと、今日鳥羽と話したこと、ソクラテスなんて大昔に死んだおっさんのこととも思い出すことなんてなくて、ただ今と同じように、別の何かに追われるようになくせくしている。きっとさうだ。今までが、そうだったんだから。

「受験生」から「大学生」、「社会人」へと名前を変えていく中で、おれは今の疑問を覚えていられるのだろうか。

何もかもが急ぎ足で変わっていく中で、会つたこともないおっさんの言葉と、その言葉に何かを見出そうとした友だちと、そいつを羨ましく思つたおれ自身のことを、抱えて進んでいくことなんて出来るんだろうか。

鳥羽はこつちに視線を戻すと、ふいにおれを見て笑つた。

「同、今、途方に暮れてますつて顔してる」図星を突かれて何も言えないおれに、鳥羽はあつけからんと続ける。

「同はおれよりずっと頭いいから大丈夫。大門3の答えだつて、たぶん合つてるつて。心配すんなよー」

「なんだよ、どうせなら絶対って言えよな」おれはいつもの調子で鳥羽に笑つてみせる。うまく笑えたかどうかは、自信がない。

「バーカ、絶対なんて言葉がそうそつあるかよ」

鳥羽は楽しそうに笑つた。腹を立てる気が起じらなければ、その笑顔には清々しさがあった。

「ほら、次の時間、進路面談だぜ。しゃきっとしろよ、司」  
チャイムが鳴つた。その音に急かされるように、鳥羽は席を立つ。  
また少しづつ、音が消えていく。

教訓やの||、聞いただけじゃわからなことかと聞いてもわからなー（後書き）

倫理の授業は一番好きでした。

## 教訓その四、広ければいいとは限らない

「失礼します」

一声かけてからドアを開ける。予想していたよりずっと狭い部屋の中の、一つしかない机の向こう側に座っている後藤先生と目が合つて会釈をする。

「とりあえず座れ。今、資料出すから」

先生が机に積まれた書類をめくつたり取り分けたりしている間に、おれは初めて入った進路指導室を見渡した。

トイレの個室3個分くらいしかない狭いスペースに、飾り気のない事務机が一つと、今おれたちが腰を下ろしている無個性なパイプ椅子が二つ。この部屋にあるものはそれだけ。先生の後ろ側に窓が据えられていなかつたら、さぞかし息の詰まる空間になるんだろう。もっとも、あつたところでこの狭さに何か変化が出るわけじゃないんだけど。

おれの視線がきょろきょろと落ち着きなく動き回っていることに

気付いた先生は、おかしそうに笑う。

「望月は、この部屋に入るの初めてだつたか。名前のわりに普通の部屋だから、驚いただろ」

「はい、まあ」

普通と言つにはあまりにも殺風景だ。進路を相談するためだけに作られましたと言わんばかりの無駄のない様が、なんだか新鮮だった。

「おれも、あんまり好きじゃないんだよな、この部屋。狭いし、圧迫感あるし」

先生は大きな体を縮めるような仕草をしながら言つ。

たしかに、後藤先生には窮屈だつ。

後藤先生に担当してもらつていない生徒は、ほぼ全員先生を体育教師だと思っている。がつしりした体躯と、体育祭で誰よりも張り

切つている姿を見れば無理もない。授業で滑らかに古典の活用形を暗唱しているのを見てきていなかつたら、おれも未だに国語の先生だと納得できずについたに違いない。

「望月は第一志望、決めたか」

「はい、一応」おれは用意しておいた学校名を口にする。おれの成績ならなんとか狙えるところにある国立の大学だ。

先生も、手にした資料を見ながら頷いてくれる。おれの今までの成績や模試の結果なんかが書かれているであろうその資料には、おれの身の丈にあつた希望を否定する材料にはならないから、予想どおりの反応ではある。

「まあ、望月は授業も真面目に受けているしな。今の調子で頑張れば、行けるだろ」

先生の肯定的な言葉に、おれの体から力が抜けた。知らず知らずのうちに力んでいたみたいだ。

「もちろん、油断は禁物だぞ。あくまで、今のペースを維持できればの話だからな」

先生は念を押すように言いながらも、表情は柔らかかった。つられるようだ、おれも笑つた。緊張がほどけると、人間といつのは笑つてしまつ仕組みになつていてるらしい。

「ところで、どうしてこの学校を志望したんだ？」

「国立がいいんです。私立は学費、高いんで」

「そうじやなくて、この大学がいいと思った理由だよ」

先生はあくまでも穏やかに言つた。おれが先生の質問の意味を勘違いしていくとでも言つた。「望月の今の答えじや、学費以外に選考基準を持つてないと取られかねないぞ」

言葉に詰つた。図星だったからだ。

それでも、なんとかそれらしい理由を言わなければと、おれは口を動かす。

「それは、おれの取つてる科目が受験科目として優遇されていて、有利だから……」

「それじゃ、田舎の理由にはならないだろ。学費が安くて、入ればうだつたから選んだってことになる」

先生と田舎が合つ。笑つてはいなかつた。

おれは自分の図星がとっくに見抜かれていることにようやく気が付いた。

「べつに、責めているわけじゃないんだ。自分の努力に見合つていない学校の名前を大っぴらに言えることが美德つてわけじゃないからな。望月の選択は現実的だし、親に負担をかけないように考えていることは偉いと思う」

眉間にしわを寄せ、言葉を慎重に選んでいる先生が、とても寂そくに見えたのは、なぜだろう。

「だがな、『入れるから入る』じゃないんだ。『入りたいから入る』。そうじやなきや、義務教育を終えた後にも学生を続ける意味がないだろ」

先生は、諭すような穏やかな調子を変えなかつた。それが辛かつた。自分がどんどん小さくなつていいくみたいで、このまま消えてしまえる気がした。

「たしかに、今は大学全入時代つて言われてるし、名前さえ書ければ誰でも大学生になれる。望月は眞面目に勉強している方だし、そこそここの大学には入れるだろ。でも、入るだけでいいなら、学生を続ける意味はないとおれは思う」

先生はパイプ椅子の背もたれに大きな体を預け、椅子が大げさな音を立てる。この部屋には、今この音しかない。

「自分で考えて、自分で決めろよ。学費とか、レベルがどうとかは、その後で考へることなんだから」

先生はそう言つて、大きく伸びをしてから「それにしてもこの部屋、本当に狭いな」とつぶやいた。

面談が終わつてから廊下に出てみて、たしかに進路相談室は狭かつたなと実感した。

窓がいくつも並んだ廊下は比べ物にならないほど開放的だし、い

ろんな場所からいろいろな音が聞こえてくる。

その広さが、今の ore にはたまらなく鬱陶しかった。

教訓その四、広ければいいことは限らない（後書き）

私の母校の進路指導室はやけに狭かったです。他の学校もそうだと  
は言い切れませんが。

## 教訓その五、むりしても知りたいのなら人に聞くことをためらつてはいけない

家の玄関のドアを開けると最初に田に入ってくる、奥までまつす  
ぐに伸びる廊下。那一番奥に面しているところがおれの部屋、つ  
まりおれしか使わない部屋がある。

那一番奥のドアが開け放たれていた。

「…何やつてんの」

「司、あんた、帰つてきたら最初に何か聞かずにはいられないわ  
け? もつと他に言つことがあるでしょ?」

「…」おれの部屋なんだけど

足を崩して座り込んでいる姉ちゃんの足元は、ゴミともガラクタ  
ともつかないもので散らかっている。押し入れが開いていることか  
ら考えると、そこから引っ張り出してきたんだね。

「懐かしいでしょ、お母さんが取つておいてくれたみたい」

姉ちゃんは自分の周りに並べた小学校の頃の通知表だの運動靴だ  
の、もう絶対に使わないと断言出来るものたちを見渡して嬉しそう  
に言つ。「思い出は大事じゃない」と言い張つて、なぜかおれの部  
屋にそれをため込んでおくスペースを設けた母さんの表情そつくり  
だ。やっぱり、親子つて似るんだな。

「思い出に漫るのは結構だけど、おれの部屋なんだから勝手に漁  
るなよな」

「あら、もともとは私の部屋じゃない。私が家を出た後にあんた  
が使い始めたんだから、いわば私が貸主なのよ。それとも、見ら  
れたら困るものでも隠してたわけ?」

突つ立つたままで田線の合わないおれを仰ぎ見た姉ちゃんは、に  
やにやしていた顔をふと真顔へと変えた。

「あんた、夏期講習行くとか言つてたけど、マラソン大会でもや  
つてたわけ?」

姉ちゃんの真つ直ぐな田から逃げるよつて、おれは鞄を下ろすつ

いでのように視線をそらした。

「こんな暑さの中でマラソンなんてやつたら死んじまうだろ。職業柄、そういうのはわかるんじゃないの？」

「それは、ただけど」姉ちゃんは珍しく口ひもるような間を空けてから、独り言のように「ずいぶん疲れた顔してるから」と漏らした。本当に、口の間からうつかり出してしまいましたと言わんばかりの、不本意さを滲ませて。

「受験生なんて、みんなマラソンランナーみたいなもんだろ。常に誰かと張りあつてんだから」

おれは軽い調子で言い返し、立ちあがった姉ちゃんの横を素通りしてデスクチェアに腰を下ろす。

座つてから、自分がすごく疲れていることに気付いて驚いた。立つていたさつきまでは何も感じなかつたのに、もう足に力が入らない。

自分の足で立つていなくていいところのは、今のおれには笑い出したいくらい素敵なことに思えた。

行き場所を決めて、あるいは踏みとどまる理由を抱えて、自分の動力を頼りに生きていくのつて、途方もないエネルギーを使う。一度止まると、それがよくわかる。

「じゃあ、司は今、走っているわけだ」姉ちゃんは何かを含ませるように、ゆっくりと言った。行間を読めと授業で怒鳴つていた後藤先生の声が、ふとよぎる。

「止まってるけど、見ての通り」

茶化すように、おどけて言った。柄にもなくマジになつてる姉ちゃんを笑つたつもりだったのに、おれ自身がダメージを受けて、視線がまた下がる。

自分の足で踏ん張る力もなく、行きたい場所もない、今のおれ自身を、おれは笑いたかったのかもしれない。

そう思つたとたん、おれをなんとか支えていた背骨まで仕事を止め、おれの全体重を引き受けさせられたデスクチェアが悲痛な音を

上げる。

疲れた。体に力が入らない。

今まで自分の重心を支えていたものが何だったのか、忘れちゃつたみたいだ。

背もたれにだらしなく寄りかかると、重い頭は垂れ、自然と目線は上にいく。表情のない天井に、視界が遮られ、他に何が見えるわけでもないのに、視線を何かに逸らすことはひどく億劫だった。特に見ていたいものなんて、ない。この楽な姿勢を動きたくなかった。おれはいつたい、どうやって立ちあがって、これから歩いて行けばいいんだろう。

「そうだね、止まってるね」姉ちゃんは笑わなかつた。さつきまでの強張つた表情も、今はない。

「また、走り出せそう?」

「そりや、そのうちはそうしなきゃならないんだろうな」おれは天井に顔を向けながら投げやりに言つた。「ずっとこのままつてわけにはいかないだろし」

そう言いながらも、本当にそう出来るか自信がなかつた。別に行きたい場所があるわけじゃない。この部屋は狭いけど、自分の足を酷使してまで出て行きたい思えるほどの何かを、おれは知らないんだから。

さつきの後藤先生の寂しそうな顔が浮かんで、それから逃げるようにな、おれは姉ちゃんの方に首をひねる。

「で、姉ちゃんは何やつてんだよ。押し入れなんて、昔のものしか入つてないだろ。中のものこんなに引っ張り出してきて、今になつて学生時代の運動靴でも必要になつたわけ?」

「ちょっとね、探し物」姉ちゃんは自分のまわりに散らばつた書き初めの紙やケースに入つたりコードーなんかに順番に視線を配つてから「昨日物置も見たんだけど、見つからなくて」と途方に暮れたようにつぶやいた。

昨日の人騒がせなビーチボールプールは、探し物の最中に出て來たと

「うう」とか。呆れたけど、ようやく納得した。存在すら知らなかつたはずのものを見つける過程は、一応あつたわけだ。

「卒業アルバムなら、たぶんここにはないぜ。母さん、一応おれが使いそうなものを集めたみたいだから」「

もつとも、それは母さんの基準であつて、この部屋が明け渡されてから1年ほどで中学生になつたおれに、リコードーや書道セット、小さくて履けなくなつた運動靴なんて必要ないのだが。

姉ちゃんは打ち明けるのをためらうように視線を泳がせる。そして自分が出してきた物の圧倒的な量を目の当たりにして、このまま一人で探していくも仕方ないと観念したのか、おれから目を逸らしながら「書類つていうか、紙、なんだけど」とようやくそれだけ言った。

「紙？卒業した後にも必要な書類なんてあんの？」

「だから、書類じゃないんだってば」姉ちゃんは不機嫌そうな低い声を出すけど、恥ずかしがつていることがなんとなくわかつた。見られちゃ困るものつてことか。ラブレターの類なのかもしない。

「紙っぽいものは、たしか上の段にまとめられてたはずだけど」

「知ってる。一つだけ白っぽい色の箱に、でしょ？」

姉ちゃんの指さした先には、たしかにおれの示した段ボール箱がすでに開封され、内容物が箱を取り囲むように出されていた。あまりにも物が多くつたから氣付かなかつた。

「教科書くらいしかなかつたわよ」

姉ちゃんが非難を込めておれに突き付けて来たその一冊に、おれは「あ」と思わず声を漏らした。

「何？ 司の世代つて、倫理やらないわけ？」おれの反応を不審に思った姉ちゃんは、手にした教科書をまじまじと見る。「時代つて、変わるものねえ」

「いや、今も倫理はあるよ。おれが取つてないだけ」

姉ちゃんから半ば取り上げるみたいに、古びて端々が黄色くなつて、いる教科書を受け取る。

「何？倫理に興味あるの？」おれがページの隅々に素早く目を配つている様子に驚いたように姉ちゃんはきょとんとしている。

「いや、興味があるって言うか」索引を引いた方が早いことに気付いたおれは、一度閉じてから後ろの方を表にして、またページをめくる。「友だちと倫理の話したときに出た名前、わからなくてさ。なんか、悔しいじやん、そのまま放つておくのって」

「何て名前？」

「ソクラテス。倫理の教科書で一番有名な人だつて言つてたけど姉ちゃんは心当たりがあつたようで、「ああ、ムチノチの人か」と嬉しそうに言う。7年も前に学生をやめた姉ちゃんに、去年まで取つていた科目で後れを取つてることが判明してしまつたわけだけど、今はどうでもよかつた。

「ムチノチ？ どういう字？ 人種？ まさか国の名前じやないよな」現役で地理を取つているおれは、そんな地名は知らない。

「無知の知。何も知らないの『無知』と、知つているの『知』で『無知の知』。地名じやなくて、座右の銘みたいなもんかな」

ますますわけがわからず、首を捻らずにいられないおれに、姉ちゃんは得意げに説明してくれた。

「ソクラテスはね、神殿から『ソクラテス以上の賢者はいない』つてお告げを受けたの。神様から世界一のお墨付きを貰つたんだもん、そりや驚くわよね。で、ソクラテスはその大それた言葉を否定してくれる誰かを探していろんな知識人に会つて話をするわけ。世の中にはこんなに物知りな人たちがいて、神様が言うような人間は決して自分のことじやないつて、納得したかったのね。でも、結局、ソクラテスは自分が世界一知恵があるって結論を出すの。有名な政治家や詩人、いろんな分野の職人にまで話を聞いた末に、よ。とんだ傲慢よね」

姉ちゃんはおれの方へと視線を戻すと、「そう思わない？」と、おれの答えを促してくる。

おれが答えられずにいると、姉ちゃんは「でも、実は違うんだな、

これが」と楽しそうに言つ。おれが額かずにいたことを喜んでいるのが、なんとなくわかつた。

「みんな、知つたかぶりだつたの。知つたつもりになつてたのよ。ソクラテスの素朴な質問に、筋の通つた答えを返せなかつたの。ソクラテスはね、自分が何も知らないつて自覚があつたから、普通の人や、まして自分の知識に自信のある人が素通りしてしまつようない些細な疑問を考えずにはいられなかつた。疑問が尽きないことを、知識がない結果だと思つてたわけ。そこが、自分の知識量に絶対の自信があつた知識人たちとソクラテスの違いだつたのよ。つまり、無知の知つていつのは、自分が何も知らないことを知つていつうことなの」

姉ちゃんは説明を終えると「何年も前にやつたきりだつたけど、けつこう覚えてるもんね」と言つて笑つた。

「ホント、やればやるほどわからなくなる」とばっかりだよね。習つてた頃はピンとこなかつたけど」

姉ちゃんはそう言つと、窓の方に視線を向ける。その向こうに広がる夏の青空は、果てを見せないほど青く、どこまでも続いている。ソクラテスの言葉の意味がわからないと言つたときの鳥羽もそつだつた。とても遠いところを見ていた。

おれたちが本当にマラソンランナーだとして、いつたいどこまで走ればいいんだろう。田に見えるゴールは、本当にあんただろうか。もう誰とも張りあわなくて良くて、自分の足を酷使することもない場所に、いつになつたら辿りつけるのだろう。

姉ちゃんはおれよりずつと先を走つてゐる。昔からずつとそうだった。おれの足場には、いつだつて姉ちゃんの軌跡があつた。

それなのに、どうしてそんなことを言つんだよ。

やればやるほどわからなくなるなら、おれは何のために走つて行けばいいんだよ。

そう思つたら、おれはもう口走つていた。

「それって、変だよ」

姉ちゃんとまた目が合つ。

「何だよ、無知の知つて。知らないことを知つてるつて、いつた  
い何がそんなに偉いんだよ。知識なんて、あればあるほどいいんじ  
やないのかよ」

受験が終わればいいと思つた。そうすれば、もう「しんどいだけ」  
の勉強をしなくてすむから。試されるのも終わりだと思つた。  
でも社会人になつて働く姉ちゃんといつ「現実」が、おれの「ゴー  
ルをまた遠ざけた。あんなに大きかつた姉ちゃんを縮めてしまつ「  
将来」は、確実に待ちかまえているのに、未だに何を目標として走つ  
ていけばいいのかわからずにする。

「頑張つた分だけ何か見返りがあると思つちゃいけないのかよ。  
どうして進んだ分だけわからなくなつちゃうんだよ。おれたちは、  
時間が経つほど成長していくんじやないのかよ」

おれは今まで自分を納得させてきた「建前」と対極にあるもの  
おぞましさに身震いした。こんなに醜くて、浅ましい期待が、ずつ  
とおれを形作つてきていたなんて、情けなくて消えてしまいたくな  
つた。

姉ちゃんはしばらく何も言わなかつた。当たり前だ。弟に急にこ  
んなことを言われたら、何と言つていいかわからないだろ？

「じゃ、聞きに行こう」

きつぱりと放たれた声に呼び覚まされるように、おれは顔を上げ  
る。

「明日は休みでしょ？ 司、あんたも来なさい。行けば、何かわ  
かるはずだよ」

姉ちゃんは一人、大きく頷いた。

教訓その五、迷っても知りたいのなら人に聞くことをためらってはいけない

頑張つてください。あとちょっとです。

## 教訓その六、変わるものばかりではない

家を出たのは、結局午後になつてからだった。

「一番暑い時間帯に外出することないだろ」

「いいのよ。あんまり早くに行くのも失礼になっちゃうでしょ」「姉ちゃんはもつともらしことを言つけど、本当は着て行く服が見つからなかつた結果だとこいつことを、おれは忘れていない。

「とりあえず降りた駅は間違いないはずだけど、道、こつちで合つてるのかな」

「姉ちゃん、一度来たことあるんじやなかつたのかよ」

「何年も前にね。すっかり様子変わっちゃつてるから、初めて通るような感じ」

「そんな調子で、ホントに着けるのかよ」

おれのため息など露知らず、姉ちゃんは遠足気分で歩きまわつている。見知らぬ町で迷子になりかけている危機感など欠片も感じていないので、傍から見ているとよくわかる。

家の最寄り駅から電車に揺られること4駅、降りた先は地名なら知っているけど、一度も来たことのない町だった。おれと姉ちゃんは地図もなく、ただ住所が書かれたメモだけを頼りに彷徨ついている。

「安曇先生の家に行こう」

昨日、姉ちゃんは重大な宣言でもするような重々しい口調で一言、そう言つた。

おれが呆気にとられて何も言えないでいると、姉ちゃんは「まさか司、先生のこと忘れちゃつたんじゃないでしょうね」とひどく顔をしかめた。「男子、マジ信じらんないんだけど」と何かにつけて吐き捨てるクラスの女子の表情そつくりだ。

「いや、覚えてるけどさ、でも」おれはとりあえずそれだけ急い

で言つたものの、後に言葉が続かなかつた。その先を口に出すのをためらうほどには、おれは先生のことが好きだつたから。

安曇先生は7年離れたおれたちきょううだいを、偶然にも両方受け持つてくれた中学校の頃の先生だ。

定年を間近に控えた年齢に見合つた白髪頭に分厚いメガネ、ちょっと屈み気味な姿勢、女子によつては見下ろされてしまふ小柄な体格。

安曇先生を誰かに説明しようとするとき、とにかく年寄りで小さい人としか相手に受け取つてもらえないのがちょっとともどかしい。生徒であるおれたちにも敬語を使って接するような律義さも、年齢に見合わず可愛らしい仕草も、その反面ふと浮かべる、長い間生き続けてきた人しか出せないよつな穏やかで寂しそうな表情も、言葉にして説明するのはなかなか難しい。

おれも、確認したわけじゃないけど姉ちゃんも、安曇先生のそういう「説明しづらい」特徴が好きだつた。

会わなくなつてもう何年にもなるけど、今でも鮮明に先生の姿は思い出せる。  
未だに、忘れられずにいる。

「あ、ここだよ。青い屋根にオレンジのポスト! それにほら、表札も安曇だよ、変わつてないなあ」

姉ちゃんははしゃぎながらおれを手招きする。無事目的地に辿りつけたことには安心しているけど、それを姉ちゃんのように無邪気に喜ぶには時間をかけすぎた。容赦のない日差しは、おれに「母さんに借りた靴なんだから、走つてヒール折るよつなことすんなよ」と言う力しか残してくれなかつたようだ。

安曇先生の家は和風というよりは「まさに日本家屋」という表現がしつくりくる家だつた。玄関口になつてゐる引き戸の前に立てば、すぐ横に控えめな広さの庭が見える。表札の「安曇」の文字は家主

と同じくらいの古さを感じさせているけど、今もこうして役目をしつかりと果たしている。それをじつと見つめていたら、視界の中に姉ちゃんの腕がにゅっと伸びてきた。表札のすぐ隣にあったインター ホンを押す。腕時計焼けが目に新しい。いつもしているアクセサリーの延長みたいなカラフルな腕時計も、今日の服装にはふさわしくないからという理由で外してきたことを思い出した。

「はーい、どなたあ？」

家の奥の方からかけられた声に、思わず背筋を伸ばす。姉ちゃんがインター ホンに向かつて話そつとしたけど、それを待たずにドアが開けられる。

「あら」

出て来た老婦人は、おれと姉ちゃんを前にして一瞬驚いた様子を見せたあと、ふつと笑顔になつた。深い皺がすべてほぐされた、とても柔らかい笑顔だつた。

見知らぬ人間がいきなり尋ねて来たことに驚いたんだろう。

その後笑ってくれたのは、おれたちの服装が理由だということはなんとなくわかつた。

学校の制服を着たおれと、この暑さのなか、白いブラウス以外はすべて黒一色の服装の姉ちゃん。女人人が、おれたちを一通り眺めてから浮かべた笑顔は、嬉しそうにも見えたし、それ以上に悲しそうにも見えた。

「主人に用があつて来てくれたのかしら？」

「はい。安曇先生に預かつていただいた物を引き取りに伺いました」

姉ちゃんの言葉に、奥さんらしき女の人は何か心当たりがあるらしく、「ああ」と安心したように頷く。

「上がつてちょうどいいな。主人に挨拶、していってくれるでしょう?」

「はい、ぜひお焼香させてください」

必要なことは姉ちゃんが言つてくれたから、おれはただ黙つて頭

を下げる。

動いた拍子に線香の控えめな匂いが鼻孔に入つて、おれは回れ右をして駆け出したい衝動をなんとかこらえて玄関の敷居を跨いだ。

## 教訓その六、変わるものばかりではない（後書き）

喪に服す期間は故人との関係にもよるやうなのですが、長くても一年くらいだと聞いた覚えがあります。

## 教訓その七、自分のことは自分にしかわからない

「望月さん、ね。喪なんてもう何年も前に明けちゃったから、たまに尋ねてくる人たちはみんな普段着なのに、わざわざかしこまつた服装で来てくれたもんだから、驚いちゃつたわ。この暑さに喪服の黒は大変だつたでしょ?」

奥さんである悦子さんに居間に通され、お互いに血口紹介を終えると、まずそう言われた。

悦子さんの言葉通り、たしかに大変だつた。道中ではなく、着るまでが。

帰省中に姉ちやんが喪服を持つてきているはずもなく、母さんが昔着ていた物を探し出すことに午前中は費やされた。履いてきたサンダルで出るわけにもいかないから、それ用の靴まで探した。付き合わされたおれの心中を察してくれる悦子さんは、本当に出来た人だと思つ。

「いえ、職業柄、いつものはちやんとしておきたいんです。何年も経つてから伺つて、今さら遅いとは思つんんですけど」

姉ちやんは気まりの悪さを誤魔化すように、出してもらつた麦茶を口に含む。おれはひたすら黙つて、姉ちやんの用事が終わるのを待つた。

「職業、といつのはやはっぱり、門出に關わるものかしら?」

悦子さんの言い方はすぐ回つくどかつたけど、ちらりと向けた視線の先が先生の写真が飾られた仏壇だつたことドビンときた。

「はい、看護師をやつているんです」

姉ちやんの口調は淡々としていて、自分の言葉に何の感情も出しないようにしているみたいだつた。

悦子さんもそれを感じ取つたようで、普通ならこの後に続く「どう?順調?」とか「やりがいのあるお仕事でしょ?」といつセリフを出して話題を引っ張ることはなかつた。

「主人に受け持たれていたのは、いつ頃だったのかしら」

「中学3年生の時です」姉ちゃんの視線を感じて、おれは慌てる。

「おれも同じです」と付け加える。

「そう。定年も、たしか中学校だったわ。あなたたちは、主人の持つた生徒さんの中でも最後の方だったのね」悦子さんはいたずらつぱく笑う。「どう?ボケてたり、物忘れひどかったりした?」

「いえ、本当に、いい先生でしたよ。私、先生の授業のおかげで社会科が好きになつたんです」

姉ちゃんは懐かしそうに笑う。倫理の教科書を見て連想しただけあって、先生は姉ちゃんの在学中も社会を教えていたようだ。

居眠りしている生徒がいてもまつたく咎めず、のんびり授業を進めていた先生の姿を思い出す。青筋を立てて怒鳴るような人じゃなかつたから舐めていたやつらもいたけど、先生は慕われていた。勉強に限らず、「質問」に行く生徒は多かつた。おれも一度だけ行ったことがある。特に何をしてくれるわけでもないけど、神社に佇む大木のようだ、そこにいるだけで人に何か感じさせることが出来る人だつたから。

姉ちゃんと悦子さんは、先生の思い出話や、最近のうだるような暑さについて楽しそうに話している間、おれは所在なく麦茶の入ったグラスを眺めていた。

どうしておれ、先生の家に来たんだろう。

姉ちゃんがおれを振りまわすのは今に始まつたわけじゃない。だけど、来る理由なんてよく考えればおれにはないわけだし、断つて家に引きこもることも出来たはずだ。学校があると言えば、姉ちゃんは無理におれを連れてくることはなかつたとも思つ。聞きに行こう。行けば、何かわかるばずだよ。

姉ちゃんの言葉に、おれは不覚にも頷いていた。

先生はこの家に限らず、世界中探しても、もうどこにもいない。何年も前から知つていることだ。

それなのに、おれはこの暑さの中、姉ちゃんと一緒に電車に揺ら

れ、知らない町を歩き回り、線香の匂いを嗅いで、ふいに泣きたくなつた。

おれは、先生に何か聞きたいことがあるのかもしれない。

「司、お線香、上げさせてもらおう」

姉ちゃんの声で我に帰る。

「じめんなさいね、長話に付き合わせてしまつて。この年になると、やることなんて家の掃除くらいしかなくて、おしゃべりが樂しくてしようがないのよ」悦子さんは、笑うと本当に先生の奥さんなんだどうかと思つてしまつくらい若く見えた。

田に入る位置にあつた仏壇の前に座り、おれと姉ちゃんは然るべき手順を踏む。線香に火をつけたり、銅製のお椀みたいなものを棒で軽く叩いて「チーン」と鳴らす際の手順はよくわからなかつたから、姉ちゃんに合わせた。

手を合わせ、田を閉じる。瞼の裏は、さつき自分で挿した線香の火が残つていよいにちかちか光つている。線香の香りとは不思議なもので、近寄つたからといって強く香るわけじゃないようだ。香りは家全体に均され、ふとした拍子に蘇る。その香りが自分の中に入つてくるのを感じながら、おれは先生に語りかけた。

先生、ご無沙汰してました、おれ、望月司です。忘れられちゃつてるかもせんね。お久しぶりです。

先生に受け持つてもらつてから、3年経ちました。また受験生です。

今は後藤先生っていう、先生とは正反対の人を受け持つてもうっています。いや、何が正反対かつて言えば、全部なんです。見上げるほど体格いいし、居眠りする生徒がいればチョーク投げてくるし、くしゃみなんて隣の教室まで響くほどテカイし、何かにつけては「根性」って単語使つたがるし、体育祭やりたくて教師になつたんじやないかつてくらい、暑苦しい先生なんですよ。ホント、先生とは正反対なんです。

でも、同じこと言われました。「自分で考えて、自分で決める」

つて。安曇先生、あなたもおれに同じこと言いましたよね。

おれ、わからないんです。自分が何をやりたくて、どこに向かいたくて、どんな人間になりたいのか。全然、わかんないんです。

後藤先生には、国立の大学に行きたいって言いました。学費が安いから。姉ちゃんは大学、行かなかつたんです。なんか、高校卒業したら看護師の見習いから始める学校があるらしくて、そこに行きました。勉強もしてましたけど、実際は働いていたも同然です。仕事も勉強も両立して、今では一人前の看護師になれたみたいです。

おれは姉ちゃんみたいに目標があるわけじゃないから、とりあえず大学に進学しようと思いました。学費に拘つたのは、親に負担かけずに見習い生活していた姉ちゃんに引け目を感じていたからだつて、わかつてます。

おれには、それしかなかつた。やりたいこともないから、後藤先生の質問に何も返せなかつた。おれには、自分のものが何もない。

もう少し先に行けば、何か変わると思ってたんです。今まで、ずっとそうでした。中学生のときは高校生に、高校生になつた今は大学生に、それぞれ期待してたんです。何もないおれにも、いつか何か芯が出来るんじやないかつて。姉ちゃんのずっと後ろをうろうろしているおれじゃなくて、一点をしつかりと見据えて走り出せるときが、いつか来るんじやないかつて。

中学生のとき、おれはあなたに聞きました。「いつになつたら、考えなくてよくなるんですか」と。高校受験を控えて初めて進路が割れる場面に立たされて、自分で選んで進んで行かなくちゃならぬいことに、途方に暮れていたから。

「いつになつたら、と聞かれれば、『いつまでも』と答えるしかありませんね。僕たちは自分として生きていくかぎり、自分で考えて自分で決めていかなくちゃならないんですから」

先生のこの言葉に、おれは今でも向き合えずにはいるんです。

「ほら、望月渚さん宛て。ちゃんとあるわよ」

悦子さんは四角いクッキーの箱を開けると、一通の手紙を取り出した。何年も前のものだと一目でわかる、黄ばんだものだった。

「主人に言われてたの。いつかきっと受け取りに来るはずだから、必ず渡してくれって。来てくれてよかつたわ。あの人つたら、住所も残さずに逝っちゃうんだもの、本人に送れなくて困つてたのよ」  
姉ちゃんはとても小さい声で「ありがとうございます」とだけ言つた。手紙を受け取る手は震えていた。

「10年越しの再会ね。大事にしてね。私が書いたわけじゃないけど」悦子さんは、今にも泣きそうな姉ちゃんに、とても優しい声で言つた。

教訓その七、自分のことは自分にしかわからない（後書き）

ありがとうございました。 次で最後です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5809y/>

---

ソクラテスの背中

2011年11月23日14時53分発行